

# モダンデザインの背景を探る

## アヴァンギャルド住宅誕生における諸事情その3ー反感から容認へー

塚口眞佐子

Behind the Evolution of Modern Design: Research and Analysis on the Attitude towards Modern Design around 1930  
Tsukaguchi, Masako

### I. はじめに

ドイツの地方都市を俯瞰すると、勾配屋根の建築が景観を構成し、その中のモダン建築は現代でも特異感が否めない。当時の違和感、攻撃が推察される。そのような中、モダン住宅の初期クライアントは、前稿と前々稿の総括のように、モダン理論に自身の革新的人生観を重ね、ノブリス・オブライージュ的に改革の使命感に燃えた富裕層であった。その意識は市民層には求められない。彼らは機能性、合理性からのアプローチで、そのポイントの一つが、「清潔・健康」だった。実際、20年代は、世界的に社会生活における「清潔意識」の劇的な転換期だった。モダンデザインの啓蒙・波及期とびたりと重なる。本論では、啓蒙活動としてのヴァイセンホフ・ジードルンクと、バウハウスのニュースソースとしての存在と絡め、モダンへの反感から容認への転換を、社会背景から読み取ることとする。

### II-A. モダンへの反感 ヴァイセンホフの場合

近代建築の動向に決定的な影響を与えたとされるヴァイセンホフ・ジードルンクとは、シュトゥットガルト市の資金提供、ドイツ工作連盟主催で1927年開催の住宅展である。批判が当初から続出し、多くは政局がらみと右傾化する世情からだった。芸術監督ミースが「全て左翼建築家に委ねる」と述べ、主要人物の多くは左派だった。ヴァイマル共和国の政局はモダニズムに好意的であるも時勢の右傾化に伴い、批判が噴出する。

守旧派の批判は、素人的でアイデアスケッチ・レベル、非実用的な配置計画、擁壁工事の不経済、伝統的工法からの逸脱、地域性無視のフラットルーフ、居住性無視の住戸、地下貯蔵室の不在、非現実なハンドリング、などを挙げ、住宅への回答案や合理化ではないとする。当地では無名のミースの任用にも、「超高層ビルの描画以外、能のない男が示すアマチュアリズム」と異議が出る。「イェルサレムの田舎」「イタリアの丘の村落を想起」、「オリエンタル・イミテーション」、「ニュー・モロッコ」、「(コルビュジエを揶揄し)壊れたリビング・マシン」「中央アフリカの呪わしいシロアリ塚集合体」、「シュトゥットガルトの恥ずべき面汚し」などの嘲笑が新聞掲載される。批判は右傾化する世情の反映でもあった。ナチが権力掌握後は「劇場型建築家や抜け目ない輩の無駄使い作品」、「大きな受注への野望からの酔狂」などと記され、ナチの新市長は全体破壊を執拗に要求する。

右派のみならず共産主義者からも批判があがる。ローコストで高い居住性、新精神に溢れた新住宅が目されたが、ローコストは実現されず、税金の無駄として批判的になる。非常にタイトな工期、慣れない工法、建築家選定の長期化、度重なる変更、ミース自身の作業遅延や、彼の独断的高

グレード指示、などが影響した。結果、戦後の緊急課題だった労働者階級用住宅計画は、高学歴中流階級向けへと変容する。左派から「求められている贅沢でない室内はミースの集合住宅では24戸に1戸のみ」、「必要なのは住める家で機械室ではない」と批判されたが、ドイツ人一般にとっても、住宅建築の常識をはるかに超えたものと映った。しかしそれが、高学歴中流階級に向けた住宅の出現を招き、従来のモダン住宅=低所得者用集合住宅という概念を覆し、モダンデザインの地平を広げることになる。

### II-B. モダンへの反感 バウハウスの場合

バウハウスとはヴァイマル共和国と重なる1919年から33年まで存続し、政局に翻弄され続けた芸術学校だった。比較的小規模にも関わらず、また他の有名例の存在にも関わらず、時代の攻撃がとりわけバウハウスに向けられたことも、アヴァンギャルドの代名詞となった理由である。

誕生数週間後からメディアにとってバウハウスはまさに、餌食、だった。メディアからの攻撃が市民の反感を醸成する。その一方で、その名の流布に貢献、という皮肉な結果を招くことになる。28年には3,356種という多数の日刊紙が存在、いずれもイデオロギー色濃く、モダンへの反感を植え付ける保守的伝統紙が過半数、という状況が頻繁な批判記事につながる。

開校の直後から反感は存在した。その一因は、精神障害を起こすとされた初期のハーモナイズ理論の実践の他、バウハウスの自由な気風で、服装、裸体での日光浴、男女区別の無い行動、などである。その反感は20年代初期の空気を反映している。女性の参政権獲得や就業率増加などからの、ヴァイマル期の「新しい女性」の誕生が揶揄や反感を生んでいた。メディアで誇張された「新しい女性」像は、時代の墜落の象徴と思われた。解放的なヴァイマル文化への反感、そのスケープゴートがバウハウスだった。「バウハウス」という語は、保守化する時代の要求に応じて、「気遣いの保養施設」「共産党本部の弟」と称される。その結果、この頃のヴァイマルの子供たちは、親からの叱り文句として、「バウハウスにやっってしまう」と脅しをかけられるようになる。

### ■反感に対して

このような反感の融和策としても、数々のプロモーション策が取られる。行政からも要求のあった第1回バウハウス展や、新校舎落成に伴う校舎や教員住宅の公開などである。展覧会の目玉の1つモデルハウス「アムホルンの家」では、家具を始め展示品すべてがバウハウス製品で、見学者のほとんどはショックを受け、「キャンディーの白い箱」「糠工場」「白モルタ

ルのサイコロ」「北極基地」「手術室」などと揶揄する。他のイベントと併せてバウハウス理念が初めて一般公開される機会となるも、地元人は敵意を抱き距離を置く。「始めは慣れなくても、点灯すると何とクリアで美しいこと」と照明具の賞賛も記事になるが、「鉄とガラスのフロアスタンドは、シルクのセードもなく容赦なく機械を思わせ、椅子はハタ織り機、家具は印刷機、ポットは検水管のようだ。」ともある。展覧会を契機に始まった生産だが、多くは斬新すぎ、29年まで売上げ目標を達成できていない。

次のプロモーションは落成である。26年12月の盛大な落成式には全世界から1,000人以上が招待され、新聞も色彩に限定してだが好意的な記事を書き、全世界から入学志願者や見学者が訪れる。終期には、政治的な反応も目立ってくる。32年、ミースが案内した右翼陣は、視察後、「最も目立つユダヤ・マルキスト・アートのスペースが今、ドイツから消えつつある」と宣言する。この言の「最も目立つ」と認める部分は目を留める価値がある。新校舎落成式と同時に、教授用の住宅4棟も一般公開された。ローコストのほが贅沢な平面計画や設備機器などで倍額となる。この結果と余波は翌年のヴァイセンホフに共通する。辛辣な批判とプレゼンス効果である。中でもグロピウス邸の構えは際立ち、映画にも登場する。

融和策の3つ目はたびたびのパーティ開催など社交・文化行事である。バウハウスのデモンストレーションであるとともに、市民との融和が期待された。ベルリン時代ですら開催される。これらには入場料を課し確実な収入源とされた。バウハウス・パーティとは、舞台美術、演劇、仮装、音楽を統合した生活総合芸術で、テーマに合わせ舞台美術、金工、木工、壁画などの工房が演出に力を競い、入念かつセンセーショナルな装置や演出を伴った。このような展開に、新聞が好奇心をかき立て、ベルリンやライプチヒからもゲストが訪れる。最後となった33年のベルリン時代でのパーティですら、約130名のメンバーが700名のゲストを迎えている。

### III. モダンということ 一反感から容認へ

保守的メディアによるヴァイセンホフ・ジードルンクやバウハウスへの攻撃、そして実際に存在した反感や違和感にもかかわらず、モダンデザインやバウハウスへの市民層の容認が伺えるようになる。すなわち、ベストセラー化した照明器具や壁紙などプロダクト、雑誌へのバウハウス製品の登場、映画に登場する住宅、パーティのゲスト数、などである。メディアが書き立てる反感とは異なる姿が垣間見え、モダン流布のサイレントパワーの一端が伺える。そして「気遣いの保養所」などの呼称がヒステリックであるがゆえに、保守層の危機感を如実に物語る。軽蔑的呼称のメディア頻出、その意味するものは、注目度の高さ、肯定的空気存在ゆえの危機感、それはモダンが市民にアピールし始めたことへの体制側の危機感である。31年5月の高級家庭雑誌の表紙には、バウハウス家具がモデルと共に登場していた。バウハウス・デザインが高学歴富裕層および中流市民層には、既に、「モダンリビング」そのものと好意的に認識され始めていたことが伺える。政局が、「ドイツ文化のアメリカ化」、「アスファルト文化」

として阻止を企てたモダンの何が、市民の心をとらえたのか。23年のバウハウス展のモデル住宅では、建物全体は批判されるも、キッチンや浴室、子供室は比較的好評であった。波及期のモダン支持は機能性、合理性からだった。そのポイントの一つが「清潔・健康」だった。ヴァイセンホフでも、日刊紙が計画やデザイン、構成、コストなどは全面的に批判しつつも、水洗金具や浴室など、清潔・衛生に関わる面では賞賛している。

### IV. 清潔・健康への関心

光や新鮮な空気は清潔や健康に必須、という概念も浸透していた。アメリカでは11年に、結核の脅威を減らしアメリカの生活習慣を指導する移民向けの教本が書かれている。内容は、清潔・健康のガイダンスだが、装飾の否認など、モダンの主唱者をそっくりこだまする弁でもあった。

「清潔」という観念を利用した、モダン論者の前衛ブルーノ・タウトが24年に述べた興味深い論がある。様式調装飾や過剰な室内装飾を、往時の衛生状況を引き合いに出し批判している。これらの文脈から、一般には、19世紀後半を席卷した装飾過剰なインテリアが、まだまだ美德として愛用されていたことが伺える。バウハウスですら、19年の開校当初、織物工房ではゴブラン織りなどの装飾品が183品目も作られていた。それが、31年出版の「バウハウス織物の発展」では、「室内の布類はその機能によって役立つべきである」と、装飾性を否認するまでの発言となる。当時の校長マイヤーの共産主義者としての姿勢の表れであったが、その流れの中に登場したバウハウスのプロダクトである。ファブリック感の無い家具や硬質で機能的な照明器具などである。ホコリをためずに明るい光を投げかけ、そしてクロームメッキの家具や明るい色の平滑な床材が、大きな水平窓からの光を受けて輝いた。清潔イメージと直結するものだった。

これらを用いてインテリアデザインされた住宅が前稿で紹介したゾナーヴェルト邸である。富裕層が求めたこの住宅には、当時まだまだ贅沢な浴室が3室備わり、設備機器には米国製も採用された。デザインの新奇性に加え、これらの点からもマスコミの取材が到来し、家庭誌にも登場するのである。そこで、次稿にはバウハウス・デザインを体現した雑誌 *die neue linie* を取り上げることとする。この雑誌の、延命上のテクニクであった体制寄りの編集方針が、モダンの波及にさらに拍車をかけることになる。

参考文献

- 1) Joedicke, Jurgén, *The Weissenhofsiedlung Stuttgart* (Karl Kramer Verlag 1989)
- 2) Jeannine, Fiedler, *Bauhaus* (KONEMANN; Tandem Verlag GmbH, 2006)
- 3) Friedewald, Boris, *Bauhaus* (Prestel Verlag, München, 2009)
- 4) Rosslér, Patrick, *die neue linie the bauhaus at the newsstand* (Kerber Verlag, Bielefeld, 2007)その他

大阪樟蔭女子大学インテリアデザイン学科 准教授





